学問とは何か。社会科学とは何か

倉田　稔

もくじ

はじめに
1　学　問
　1　学問とは何か
　2　学問論
　3　学問の目的
　4　学問の性質
　5　学問をする態度
　6　おわりに
　7　学生（及び一般的な人々も含む）への実際的効用
2　社会科学とは何か

はじめに

初めに，学問とは何か，次いで，社会科学とは何か，を叙す。これらは，この10年来，「社会思想史 2」の講義で最近述べていたものであり，本稿はそのエッセンスだけである。

1　学　問

1　学問とは何か

「学問」という言い方は，日本で言われ，ヨーロッパでは science（英米）；die Wissenschaft（独）；wetenschaap（蘭），にあたる。つまり日本語で

は「科学」に近い。中国の孔子[1]の言を集めた『論語』では，学 が学問のことである。学問とは科学を含むけれども，それより広い，あるいは曖昧な意味を持っているように見える。英語では，むしろ learning が，学問に近いかもしれない。例えば，フランシス・ベーコン[2]の *Of the Proficience and Advancement of Learning*. London 1605.[3]は，日本では『学問の進歩』と訳されている。

『論語』第1巻　学而篇　では，

1　……，学んで時に習う，亦説ばしからずや。

同第2巻　為政篇　では，

15　……，学びて思わざれば則ち罔く，思いて学ばざれば則ち殆(うたが)う。

と言っている。

イマヌエル・カント[4]も『純粋理性批判』で，後者に似たことを言っている。

学問とは，問うて学べ，学んで問へ，ということをしなければならない，と私は思う。

2　学　問　論

学問には，肯定，否定，部分否定・部分肯定の3つの説がある。

学問否定論で有名なものは，J. J. ルソー[5]の『学問芸術論』である。学問によって人間は悪くなったというもので，学問の全面否定論である。これはしかし，無視できない。まず，当時の学問のあり方を考えて見ると，ルソーがそう言うのは，分からなくはない。宮廷や貴族のつまらない学問だけがあったからである。次に，現代から見ても，原爆を作る学問などは，否定されてもよい。

1）孔子，BC. 552-479.
2）Francis Bacon，1561-1626.
3）この初版は，小樽商大附属図書館にある。
4）I. Kant，1724-1804.
5）J.-J. Rousseau，1712-78.

学問の部分的否定論には，レーニン[6]の『青年同盟の任務』がある。彼は，青年に呼びかけたこの演説で，大学で教わる学問は，半分はブルジョア的なガラクタであり，半分は役に立つものだ，と言う。

学問の部分否定論の，他のものは，福沢諭吉[7]の『学問のすすめ』である。彼は，当時の日本の伝統的な学問を否定している。つまり詩歌管弦の学を否定する。だから学問部分否定論である。一方，彼は実学を薦めているから，学問の部分肯定論にもなる。レーニンの前出の論議に似ているところがある。学問を否定する部分では，ルソーにも似ている。さて福沢の言う実学とは，経済学，倫理学，法律，自然科学などであり，人は，実学を身につけて有用の人となり，社会の重要な部署を担うべきだと論ずる。実際，日本では大方の所，福沢の議論が暗黙の前提とされているだろう。

普通は，学問は肯定される。その多くの議論をここでは書ききれないので，省略する。

3　学問の目的

学問の目的は，種々あるので，それによって学問のあり方は区別される。

第1は，世のため，人のため，社会のため，そして，自然の征服，人間の力を高めるために，それらのために学問はある，と考えるものである。

世のため，人のため，社会のため，と考える代表は，ヨーロッパではカール・マルクス[8]，日本では大塩平八郎[9]，などであろう。マルクスは，経済学を人間救済策として作ろうとした。一方，自然の征服，人間の力を高めるため，と考えるのは，フランシス・ベーコン[10]やトーマス・エジソン[11]らであろう。

6）W. I. Lenin，1870-1924.
7）福沢，1835-1901.
8）Karl Marx，1818-1883.
9）大塩，1793-1837．大坂の町与力。不正を憎んだ。陽明学を実践の学とし，人々のために学び，民衆のために乱を起こした。幸田成友の研究あり。
10）『ノーヴム・オルガヌム』，『ニュー・アトランティス』，『学問の進歩』，『随想集』で有名。
11）Thomas A. Edison，1847-1931.

概して，これらは立派なこととされる。ただし，一概にはそう言えない。

第2に，学問を自分のためにする，という立場である。それらは，2種類ある。

1　自分の出世のため，自分の生活のため。

2　自分の個性・才能・能力を伸ばすため。

これらは，普通に誰でも考えるものである。第1の立場に比べると，偉さでは少し劣ると思われそうである。だがそうでもなく，これも立派なものでなくはない。それにまた，大衆社会的に言えば，これらの態度をとる人が多いことによって，学問や教育が，ある意味では社会的には発達するのである。それに，自分の生活や出世のために大学へ行くとか，学校へ行くというのは，自然である。大量現象としては，これが多い。「1　自分の出世のため」に学問をするという態度で有名なものは，中国の科挙の試験に合格をしようとして勉強した昔の中国の人々である。合格すれば，高級官僚になれたからである。現在の日本でも，いい会社に就職しようとして，人々はよい大学へ行く，というのもそれである。[11a)]

それ以外の立場について。

第3に，学問の目的は無い，それ自体が好きだから，おもしろいから，という理由で学問をする立場である。例えば，多くのイギリスの学者がそうである。この第3の立場は，第2の立場の亜種に入れてもよい。

これらの分類には入れないが，入れるとすれば第4の立場がある。つまり真理を発見するために学問をするという立場もある。これは，第1の立場と重なることがあるが，微妙に違っている。河上肇[12)]は書く。「私は元来日本の学者が実際の利益ということを重んじ過ぎているのが，我国学問の進歩せざる最大原因だと考えている。いやしくも学問をもって身を立てているものが，その学問を何かの手段と心得ているようでは，自分自身で学問を第二義的のものとし

11a）現代の中国留学生にこの型が多い。
12）河上，1879-1946.

ているのだ。そんな事で学問を尊重するという気分が出てくる筈がない。……学問の本義は真理の発見にある。」(「ある日の講話」より) これは，福沢的学問論への批判かもしれない。

ついで，どの分類にも入れないが，第5の立場もある。見栄のためというものである。孔子の弟子である原憲が言っている。「世間の評判を気にして行動し，おもねり，学問は見栄のためにし，教育はいばるためにし，仁義の徳を汚し，衣服の美をつとめる。」そういう人がいると言う。これは現代でもそうだ。一般に，学問や教養を，出世のため以外では，見栄のためにやってきた。例えば，いい学校へ入ろうという人や，入れようとするその親である。こういうケースはかなり多い。ただし実は，見栄にも奇妙な役割がある。これで学校へ行く人が多くなるからである。

4　学問の性質

学問の性質というものがある。実際には科学の性質と言うべきである。それは，技術の側面である。学問や科学には，道具的役割がある[13)]。学べば利用できるという側面である。理論を学んで，使い方を教わるなら，それを使える。そういう性質がなければ，科学とは言えないのであって，そうでなければ，その営為は芸術の領域となる。人は，学んだからといって，おいそれとは芸術家や芸術的天才にはなれない。そうなるには独得の才能が必要である。しかし学問には，学べば習得ができる性質がある。そういうわけで，学問は誰にでもできる。

5　学問をする態度。

マックス・ウェーバー[14)]は，「職業としての学問」で，教壇では政治的発言

---

13) マックス・ウェーバーによれば，学問の役割＝職分があると。1，生活，つまり外界の事物や人間の行為を合理的な算段によって支配するための技術についての知識をあたえる。2，思考方法，その方法のための道具を知り，およびその道具に習熟する。3，明晰さをえさせる。(『職業としての学問』岩波文庫　160 ページ。)

14) Max Weber, 1864-1920.

をしないようにと，説いている。これは狭い政治的立場のことであろう。「社会科学方法論」では彼は，学問の手続きは客観的に，しかし主体的な立場を出せと説く。有名な「理念型」を作れという議論である。また，学問の前提は，1，論理学と方法論との規則の妥当性，2，結果が「知る価値がある」という意味で重要であること，であると言う[15)]。

最後に，活学活用主義への批判について語っておこう。学問は本来，それを生かし，活用するという任務と動機がある。しかし，学問の成果，あるいは理論，法律などは，それぞれ一体何を射程においているのか，そしてその理論が対象にするものは何かを吟味しておかないと，使い方で間違う。従って，安易な活学活用は戒めるべきである。

6　おわりに

学問や科学の進歩とは，新事実の発見，新理論の創造という2つがあって，それらによってなされる。ただし，つまらない事実の発見では困るし，間違った新理論は，害が及ぶ。

またオリジナリティ，つまり最初の説が大切にされるし，そうであるべきであろう。

7　学生（および一般的人々も含む）への実際的効用。

大学生が社会に出た時，大学で学んでいたことがどのように役立つか。ここでは，卒業という現世的ご利益（りやく）を除いて，考える。

社会人として，どんな事を喋るか，どんないいことを考えられて，それが言えるかが，社会に出てからの，活躍できる能力になるのだから，大学でどんなことを学んでいたかが，勝負になる。学問で悩みながら，つまり問い，解決の連続をしていると，結局，見識[16)]が高まる。そういう営為をしてこなかった

15）ウェーバー，150ページ。

16）見識とは，トルストイ（ロシアの文豪）が言う知恵にあたるだろう。「人間の知恵とは事物を知ることではありません。……人間の知恵とは知るに価する事物の

人は，簡単には良いことは思いつかない。

それにまた，教養・学問の目に見えない役割がある，ものを学んだ人間が，知的世界にかんして，広くなれて，深くなれる。精神生活が豊かになる。広くなれれば，人とのつながりが，多様になる。少なくても，大学時代に物事を調べることをしている人は，物の調べ方を知るようになる。物を知ること自体も大切だが，物を調べること，物を考えることも大切である。これらは体験していないと，うまく行かない。

何かを学んでおくと，知的なとっかかりができる。それが，思考のよりどころの１つになる。例えば，暗夜に航海する船に乗っている時，燈台が見えない場合と，１つ見える場合とは大違いである。学んでいれば，知的な目安ができる。他の例は，地図と山登りの関係である。地図がなくても山登りはできる。しかし地図があれば，山登りは有利である。大学時代に学んだことが，その山登りの地図に匹敵することがありうる。

学問とは，人間らしく，文化的な生活を送るためのものでもある。(一学生の表現)

2　社会科学とは何か

社会科学（Social Science ; Sozialwissenschaft ; Gesellschaftswissenschaft）とはどういうものであろうか。これは自然科学とは違っている側面がある。ここで社会とは，さしあたり人間集団のことであると，定義しておく。

1．目的から手段を知る方法。

マックス・ウェーバーが，「ロッシャーとクニース」で批判した素朴な方法がある。人間が目的を持って行動する時，目的に応じた手段を選ぶ。

秩序をわきまえることであり，その事物の知識をおのおのの重要性に応じて整理することです。」（トルストイ「トルストイがロマン・ロランに送った書簡」岩波書店　206ページ）

だから，ある人間や人間集団の目的を知れば，手段が分かる。つまり人間の行動が分かる。人間は普通は目的のために合理的な手段をとるからである。こうして，目的を知ることが社会科学の一手段になる。

2．ウェーバーの理念型による方法。

ウェーバーが「社会科学方法論」（＝客観性論文）でいう理念型によるものである。この理念型を作って，それを尺度にして，他の対象を計る方法がある。ただしその理念型を作る時は，客観的な方法で作れ，しかし主体的な立場を出せと，ウェーバーは言う。こうして，これも社会科学の一方法になる。

3．カール・マルクスの自然史的方法による方法。

社会は自然とは違うのだが，社会には，自然および自然史と同じ側面もある。したがってその側面は，普通に自然科学と同じように認識できる。これは，何もマルクスによらなくてもそうである。

4．マルクスの物象化による方法。

人と人との関係が物と物との関係になる，物と物との関係が人と人との関係になる，というのが物象化である[17]。具体的な諸個人は多様なので，分析・理解できないか，しにくい。しかし彼らの外的条件・環境は知ることができる。

つまり彼ら＝諸個人は，物の世界の代理者である場合が多い。物の世界には，その法則があり，それはそれなりに分析・理解できる。これは自然科学に近い。こうして，物の世界を知れば，その代理者である人間も，全く正確ではないにしても，それに応じてほとんど理解できる。例外はあるけれども，彼らは，物の世界の動きにつれて動くからである。これが個人でなく集団であれば，おおよそは，物の世界の動きに従うだろう。例えば，地代と地主，利潤と資本家，であり，それぞれ前者（地代，利潤）が物の世界で，後者（地主，資本家）が人間的代理者である。つまり人間集団そ

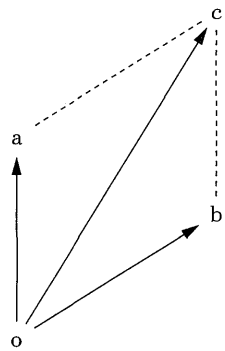
17）大塚久雄『社会科学の方法』（岩波新書）では，疎外と物象化とが混同されている。

のものでなく，かれらの外的条件をまず知れば，彼らのことがおおよそ分かる，というものである。

5．フリートリヒ・エンゲルス[18]の，力の平行四辺形による方法。

社会において，個と総和とは違う。つまり個人の行動が，社会全体の行動とは違う。しかし社会科学は社会全体の行動を知ることを目的とする。そこで個でなくて総和を知る必要がある。

例えば，Aが，o点から力aを加えたとする。1人の行為であれば，物はo点からa点へと動く。しかし，社会は1人ではない。例えば，Aが力を加えている最中に，2人目のBが，o点に力bを加えたとする。その場合，力学の，力の平行四辺形に従って，o点にあった物は，a点でもなくb点でもなく，c点へと動く。Aが望んでいないで，またBも望んでいない点へ行ってしまうのである。



つまり諸個人の力の総和で，社会は動く。その総和を知れというものである。

混雑した電車内の例でも，それは言える。ある乗客が混雑した電車に乗っている時，彼一人の望むようには簡単に乗り降りできないことがある。

6．見た物を根拠にする。

社会科学では，書く人が，見た物をさしあたりの事実として書く。見ていないものは，事実としない。ただし，資料，書物，その他の物で見た物，直接聞いたものも，ここに含まれる。だから見た直接の事態のことだけではない。しかしその意味で，宗教とは対極をなす。宗教の本質が，見ないものでも信じることにあるからである。

それゆえ，社会科学は第1次資料を重視する。資料のうちの1番初めの直接的資料を重視する。第2次・第3次資料になると，それら第2次・3

18) F. Engels, 1820-1895.

次の資料を作った著者の主観が入り込んでいるからである。こうして直接的知識の採用が大切とされる。

だから，孫びきの回避をする必要がある。孫びきとは，ある著者が引用している資料を，次の書き手がそのまま利用して，その初めの資料を見ないで書くことであり，自分がその資料を見たようにして書くことである。これは危険である。こうして引用の際，例えば，外国書を見ないで，見たとして書いたり，初めに作られた統計と，それを使って後の人が作った統計とを区別しないで書いたりするのは，危ない。

聞いたことは，それだけではかなり危険である。噂もそうである。これらは簡単に採用できない。例えば，子供の伝達遊びの例を知っておくべきである。つまり，ある人があるトピックを知らせてもらう，そして次の人にそれを口頭で伝え，それが同じように引き継がれ，最後の人が最初の人と全く内容の異なるトピックを受け取るという遊びである。そういうわけで，書かれた資料，現在では複写コピーされた資料が，より正確となる。

7．描写による方法。

研究対象を描写することだけでも，社会科学の産物になることがある。事実世界を描くのである。もちろん従来の記述より，広くあるいは深いもの，新しいものである必要がある。

描写と似ているが，社会科学のある種のものは，物語である。あるいは物語と同じようなものである。ただし，フィクションは使えない。

8．普通は，人間社会の法則・傾向，集団の動きを検出することが，社会科学の任務だとされる。

9．論　　証。

社会科学でも自然科学でも，その狙いは同じである。つまり論証する，証明するというのが，一番よい。問いを立てて，結論か仮説を出し，それを証明して見せる，というものである。

そ の 他。

社会科学の歴史の方法については，拙書『金融資本論の成立』（青木書店1975年）の冒頭を見よ。有名なものでは，事実上の社会科学について，リッケルト『自然科学と人文科学』で，議論がある。

1．オーラル・ヒストリーについて。

社会科学は，文字になっていない材料をも取り上げる必要がある。だから人々からの聞き書きが行なわれる。これは，書かれた資料世界の補完になる。ただし注意すべきだが，書かれていない資料は，知る価値が小さかったので書かれていなかったという場合がある。だからオーラル（Oral）・ヒストリーと言っても，その材料が，書かれたものより価値があるという場合に，取り上げるべきである。何でもよいというわけでもない。

2．新事実，新しい解釈について。

平たく言って，重要な新しい事実が発見されたことで，それを紹介することだけでも，社会科学を豊かにすることができる。新しい解釈は，それが正しければ，社会科学の進歩とされるだろう。

3．なお，前述の「学問とは何か」で示したことも，同様にここでも採用できる。社会科学も学問だからである。